



「K」の物語



～片思い編 1～

四間飛車愛好家

片思い 1

それは、高校1年生の秋だった。

Kは高校入学時から、1人の女の子が気になっていた。

名前は「KH」。

同じクラスのKHは、女子柔道部と言う、

現在の女性ならば、あまり選ばないクラブに入っていた。

柔道部と言っても、KHは細身で体重も軽く、
見た目は普通の女の子だった。

KはKHと直接話した事は少なかったが、

KHの笑顔が、頭から離れなかった。

しかし、Kはバスケットボール部に所属しており練習場所も離れていたのもので、

ほとんど話せず、今に至る。。。

～続く～

片思い 2

秋になるまでは特に何もなく、

ただ、少しずつ慣れてきた高校生活を過ごしていた。

Kは進学コースに所属していたので、1日7コマの授業と

放課後のクラブ・バスケットを繰り返す日々。

K「はあ... ↓」

クラブ活動後の帰宅途中、KはKHとの出会いを思い出していた。

K「思えば、あの入学式の後のHRだったな。」

実は、KとKHは同じクラスだった。

しかもこれからの3年間ずっと。

Kは教室でKHを一目見た時から、KHの笑顔が忘れられなかった。

特に理由は無かったが、何故か頭から離れなかった。

気付いたらKHを目で追うようになっていた。

その後Kは、「一目惚れしたのだ」と言う事に気付き、

「この想いを彼女に伝えたい」と決意する。

これが最後まで叶わぬ恋だと知らずに。。

～続く～

片思い3

自分の気持ちを伝えようと決意した夜は、とても気が楽になった。

しかし、次の日からはずっと授業に全く集中できず、

先生の話など、何も耳に入らなかった。

毎日毎日KHの事を目で追うようになり、

彼女と話せた時は、それだけで天にも昇るような気分だった。

しかしKHと話す事はできるものの、目はあわせられなかった(笑)

そんな日々が続く中、なんとか想いを伝えるタイミングを探るものの、

そんな時間などほとんど無いことに気付いたKは、

ついに彼女を呼び出す事にした。

ある日の放課後

K「KH。あのさ、明日の放課後ちょっと時間ないかな...？」

KH「え、ちょっとならあるよ。

ただ、予定あるから本当にちょっとしかないけど...」

K「大丈夫！すぐ済むから。」

KH「分かった！けど、何の用事？」

K「それは明日のお楽しみということで(笑)」

KH「うん！じゃあ、また明日ね！」

こうして、タイミングを作る事はできたものの、

その夜は緊張のせいで、まったく眠れなかった。。。

～続く～

片思い4

次の日。

Kは、自転車で学校に向かってしたが、

いつもよりも遠く感じた。

その日の授業も休憩時間もすべてが長く、放課後までが苦痛だった。

ただ、変わらないものが三つあった。

「食欲」と「KHの笑顔」、そして...

授業が全く耳に入らないという事だ(笑)

Kは進学コースに所属していたので、毎日7限までであった。

いったい今日1日で、何回時計を見ただろうか...

何回KHの顔を見ただろうか...

Kは待ち遠しくてたまらなかった。

そしてついに、待ち望んだ放課後がやってきた時、
急にKはそわそわし、心拍数が上がってきた。

「さあ、言うぞ！」と心でもう一度決意し、待ち合わせ場所へ向かう。

と、その時...

ピンポンパンポン♪

「1年1組のK君、1年1組のK君。
支給職員室まできて下さい。」

...

絶妙なタイミングで、邪魔が入ってしまった。。。

～続く～

職員室の前。Kは焦っていた。

ガラッ

K「O先生、何の用事ですか？」

O先生「おー、来たか！
別にたいした用事じゃないんだが(笑)」

K「なら呼ばないで下さいよ↓」

O先生「まあ、そう怒るなって。
ちゃんと用件はあるんだから。」

K「ちょっと急いでるので、手短にお願いします(汗)」

O先生「何？それは悪い事したなあ。
じゃあ簡単に話すわ。あのな...」

ここで、Kはある係を頼まれた。

○先生「...と言うわけだ。すまんがよろしく頼んだ♪」

K「これって、呼び出さなくても明日のHRの後でも良かったのでは...」

○先生「まあ、そうだな(笑)悪かった。」

K「いえ、分かりました。それでは失礼します！」

○先生「急いでる時にすまなかったな。
何があるか知らんが、頑張れ！
また明日なー。」

K「はい。また明日。」

職員室を出て、Kは待ち合わせ場所に急いだ。。。

～続く～